

福 井 県 医 師 会

だより

第638号 平成26年(2014)8月

第93回 福井県医学会総会 特集



医学会会場での大中県医会長(右)・吉井小浜医師会長(左)

醫 縫 録

外科データベースと患者の安全

がん・脳卒中登録担当理事 腰 地 孝 昭



昨年、福井大学医学部附属病院の医師会が分離独立の形で誕生し、監事を拝命しました。併せて県医師会に理事としてだれか代表を出すということになり、医学部長の命を受けて私が理事会に出席することになりました。現在、がん・脳卒中登録担当理事として微力ながら医師会活動に参加させていただいております。しかし、私の本業は心臓血管外科ですのでがん診療とはかけ離れており、まったく素人同然です。たしかに私が担当する福井大学第2外科には呼吸器外科もあり、その方面で多少の耳学問は重ねているものの他流試合の感は否めません。そういうわけで大変心許ないのですが、できるかぎりの職責を果たしたいと考えております。関係各位にはこの点、ご理解とご指導の程よろしくお願いたします。

さて、がん診療に無知な私でも“データ登録”には多少の関心があります。ご承知のように、外科領域では2011年からNCD(National Clinical Database)が開設され、現在では全国の外科手術の95%をカバーする年間120万件の手術データ登録が行われています。その結果は国内の外科手術の動向を分析するだけでなく、登録データが外科医個人の手術経験台帳となり、専門医取得のツールとしても利用されています。

実はこれに先立つこと10年、心臓血管外科の領域では全国レベルの臨床研究としてJACVSD(日本成人心臓血管外科データベース)が立ち上がりました。2001年に参加5施設からスタートし、現在では国内の主要な心臓血管外科施設のほとんど(500施設以上)が参加するナショナルデータベースとして成熟しています。その収集するデータは一症例あたり約280項目に及び、患者の術前状態から手術内容、手術早期成績まで多岐にわたります。当初は登録業務が煩雑で外科医の負担を増やすばかりとして不評な面もありましたが、私は2003年から積極的に参加してきました。その理由は、すでに先行するデータベースが欧米で試行され、手

術リスクを評価する有用なツールとなることが示されていたからです。心臓手術は現在でも平均3%ほどの生命リスクを負う侵襲性の高い手術です。だからこそ、私たちは自国の、そして自施設の心臓手術の実像を捉え、術前説明の段階でデータに基づいたリスク説明を行うことが重要と考えたからです。

私は現在、大学病院で診療の傍ら医療環境制御センターで医療安全と感染制御の部門を担当しています。偉大な先人たちの中には「外科医たるもの、訴訟の一つや二つ抱えて初めて一人前」と剛胆に言い放つ人もいましたが、患者のためにも医療者のためにもこの様な争い事は無いに超したことはありません。患者へのリスク説明に於いても、感覚や経験だけで身勝手な説明をすることはもはや時代遅れであり、データやエビデンスに基づいた説明をできるだけ平易な表現で行うことが肝要とされています。NCDにしるJACVSDにしる、ただ単に面倒なデータ登録をさせられていると被害的に考えるのではなく、私たちが行う手術という医療行為の足下を見つめるために、今後も上手に利用していくことが大切だと思います。またそのことが、手術を受ける患者の安全に直結するものと思います。

さて話題がどんどん逸れてしまいました。がん・脳卒中登録事業に関しましては正確な情報をきちんと遅滞なく登録することが重要です。日々の診療で大変お忙しいことと存じますが、がん・脳卒中診療に関わるすべての医療者や職員のご理解とご協力で着実に履行されることを願っています。

最後になりましたが、福井大学医師会は生まれたてで不勉強な点も多く、個人的にもご迷惑をお掛けすることが多々あるかと思いますが、今後ともご指導の程、よろしくお願申し上げます。